

「中 [道] の定説綱要」和訳研究 (1)

松 本 恒 爾

1. はじめに

インド仏教後期 (ca. 900-1200) において、多種多様に展開した仏教教理を低次とされるものから高次とされるものへと配置し解説していく綱要書 (doxography) が数多く著作された。このような綱要書の一つに、密教者*サハジャヴァジュラ (Skt *Sahajavajra, Tib lHan cig skyes pa'i rdo rjes, ca.1000-1100) による『定説綱要』(Skt *Sthitisamāsa*, Tib *gNas pa bsdus pa*, 以下 *SthS*) がある。この *SthS* は、およそ179の偈⁽¹⁾によって構成されており、そこで解説される教理と順序を先行研究とともに提示するならば、以下のようである。

①冒頭偈 : v.1(1)

・ Ms1v1-2, D92r6-7, P99r5-6.

①「毘婆沙師の定説 [綱要]」(Vaibhāṣikasthiti [-samāsa]⁽²⁾) : vv.2(1)-9(8)

・ Ms1v2-2r4, D92r7-92v4, P99r5-99v4.

②「経量部の定説綱要」(Sūtrānatasthitisamāsa⁽³⁾) : vv.10(1)-32(23)

・ Ms2r4-4v1 (fol.3 is missing.), D92v4-93v2, P99v4-100v3.

・ 以上の三つのセクションは、松田[1995]にテキストの提示がある。

③「無形象瑜伽行派の定説綱要」(Nirākārayogacārasthitisamāsa) : vv.33(1)-47(15)

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（1）

- ・ Ms4v1-6r2, D93v2-94r5, P100v3-101r7.
 - ・ 岩田[1998][2000][2010][2013b]に、テキスト・和訳の提示と詳細な解説がある。
- ④ 「有形象瑜伽行派の定説綱要」(Sākārayogacāraṣṭhitisamāsa) : vv.48(1)-55(8)
- ・ Ms6r2-7r1, D94r5-94v2, P101r7-101v5.
 - ・ 岩田[2014]に、テキスト・和訳の提示と詳細な解説がある。
- ⑤ 「中〔道〕の定説綱要」(Madhyamāṣṭhitisamāsa) : vv.56(1)-98(43)
- ・ Ms7r1-11r3(fol.9 is missing.), D94r2-96r6, P101v5-103v3.
- ⑥ 「*真言理趣」(*mantranaya)⁽⁴⁾ : vv.99(1)-179(81)
- ・ Ms11v1-(19)(fols.13, 15 and (19) are missing.), D96r6-99v5, P103v3-107r8.
 - ・ Onians[2003]pp.139-146に、vv.99(1)-111(13)のテキストと英訳の提示がある。

本稿は、*SthS*で解説されるこれら教理のうち、⑤「中〔道〕の定説綱要」(以下MStH)のv.56(1)からv.61(6)abまでのテキスト(サンスクリット語とチベット語訳)とその和訳を提示し、その内容の解説を行うものである⁽⁵⁾。

2. MStHについて

MStHは「*真言理趣」(=密教)のセクションの前に置かれている。このことは、MStHで解説される中〔道〕という教理が、波羅蜜理趣(pāramitānaya)(=顕教)の中で最も高く評価されていることを意味している。では、この中〔道〕とはどのような教理であるのか。これについては、以下のシノプシスから、それが中観派(Mādhyamika)の教理、つまり中観思想(Madhyamaka)であることが理解される。

0. 一般人、異教徒、仏教徒という三者の主張における過失の指摘

	v.56(1)
1. 中道への帰敬並びに MStHs の目的とその手段	v.57(2)
2. 論理による存在性の捏造の排除	
2-1. 離一多性による無自性性論証	vv.58(3)-64(9)
2-2. 不生起について	vv.65(10)-69(14)ab
3. 論理の根拠としての聖典の引用	vv.69(14)cd-89(34)
4. 世俗と勝義の双運について	vv.90(35)-98(43)

ところで、中観思想を解説するセクションにも関わらず、そのタイトルには何故「中観派」や「中観思想」ではなく、「中 [道]」(madhyamā) という語が用いられているのであろうか。このことについて筆者は、*サハジャヴァジュラが様々な中観思想を「中道」という仏教の根本的な教理として統合しようとしていたからであると推測している。何故なら、瑜伽行派では師や同輩とされる者達の教理綱要書⁽⁶⁾と同一の分類が採用されているにもかかわらず⁽⁷⁾、中観派ではそれらの分類⁽⁸⁾が採用されていないからである。さらに、このような推測にもとづくならば、チャンドラキールティ (Candrakīrti, ca.530-600) が中観派の論師として最も高く評価されながらも⁽⁹⁾、彼によって絶対に容認されないであろう離一多性による無自性性論証が行なわれるという⁽¹⁰⁾、*サハジャヴァジュラの中観思想の不可解な傾向もある程度理解することができるのである⁽¹¹⁾。

3. テキストと和訳について

本稿のサンスクリット語とチベット語訳の校訂において、異読や訂正などは適宜注記するが、連声の標準化、アヴァグラハの追加及び、分節(ダンダやシェーなど)の添削については逐一表記しない。

また、偈という性格上、直訳のままではその内容が理解し難いので、和訳では角括弧 [] によって訳文を補い、丸括弧 () によって説明を追加した。

4. MStHのテキストと和訳（1）

O. 一般人、異教徒、仏教徒という三者の主張における過失の指摘

[Skt]

pāmarais tīrthikair bauddhais ^[1]...tribhīr nāstitvakhaṇḍanam...^[1] /
maṇḍitaṃ sādhu dharmāṇām astitvāropaṇaṃ tv agham // v.56(1)

[1]conj. tribhinnāstitvakhaṇḍanam] Ms

[Tib]

mu stegs sangs rgyas par ma btus// gsum ni med par mi⁽¹⁾ 'dod pas//
legs shing mdzes pa dam pa'i chos// med par gnas pa'i sdig pa yin// v.56(1)

〈1〉P ma

[和訳]

「愚者（＝一般人）、異教徒、仏教徒の三者によって飾られた非存在性に対する反駁はすばらしい。しかし、[彼らによる] 諸法に対する存在性の捏造は悪である。」

[解説]

大乘仏教では、あるものごとを非存在であると撥無すること（apavāda）とあるものごとを存在すると捏造すること（samāropa）の二つの極端を離れること（anataadvayaṃ vivarjitam）は、中道（madhyamā pratipatti）の一つであるとされるが⁽¹²⁾、ここでは、中観派以外の一般人、異教徒、仏教徒という三者の主張には、存在性の撥無はないが、存在性の捏造という過失があることが指摘されている。そして、結論を先にするならば、MStHで批判対象となる存在を捏造する主張とは、具体的には以下のようなものである。

- ・ 毘婆沙師の十八界説、特にその無為法の常住性

- ・ 一般人の常識
- ・ 異教徒、毘婆沙師、経量部の極微説
- ・ 瑜伽行派の唯識説

1. 中道への帰敬並びに MStS の目的とその手段

[Skt]

**madhyamāpratipattattvaṃ sarvāropavivarjitam /
praṇamyāropalopāya yuktir āgama ucyate // v.57(2)**

[Tib]

**dbu ma chen po'i rang bzhin nyid// gnas pa thams cad rnam spangs pa//
btud de gnas pa zad byed nyid// lung dang rigs pas bshad par bya// v.57(2)**

[和訳]

「あらゆる [存在性の] 捏造を離れた中道という真実に敬礼して、[存在性の] 捏造の排除のために、[以下に] 論理と聖典が語られる。」

[解説]

*SthS*には帰敬偈が三つ存在するが、これらの帰敬の対象はそれぞれ異なっている。そのうち一つ目はv.1 (1) の法と人の無我たること (dharmaṃ pudgalanairātmya) であり、二つ目はこのv.57 (2) の中道、三つ目はv.112 (14) の般若と方便の合一を意味するエーヴァン (evam) 字である。そしておそらく、これら帰敬の対象は、大乘・中観思想・真言理趣という*サハジャヴァジュラ自身が依拠する三つの仏教の教理を象徴していると考えられる⁽¹³⁾。

なおチベット語訳で、「中道」(madhyamāpratipad) が「大中観」(dbu ma chen po)⁽¹⁴⁾と訳されていることは、特記しておきたい。何故なら、筆者が知る限り、これは「大中観」のサンスクリット原語が確認できる初めての例だからである。

さて、この偈では、存在性の捏造の排除という MStS の目的とともに、それを達成するための論理 (yukti) と聖典 (āgama) という二つの手段も述べられている。そして、これら二つの手段のうち、論理とは vv.58(3)-69(14)ab の内容を指し、聖典とはそれら論理の根拠となる vv.69(14)cd-89(34) の『入楞伽經』 (*Laṅkāvatāra*, 以下 *LA*) の引用を指していると考えられる⁽¹⁵⁾。このように論理と聖典を手段として論を展開することは、仏教論書においては一般的である。しかし、MStS の論理の内容と *LA* の引用状況⁽¹⁶⁾ からするならば、その内容の大部分は、シャーントラクシタ (Śāntarakṣita, ca.740-795) による『中観莊嚴論』 (*Madhyamakālaṃkāra*, 以下 *MMA*) と、それに対する自注 (-*vṛtti*, 以下 *MMAV*) を前提としていると考えられる。そこで以下の解説では、前提となる *MMA* や *MMAV* を適宜参照していくことにする。

2. 論理による存在性の捏造の排除

2-1. 離一多性による無自性性論証

2-1-1. 離一多性による無自性性論証の提示と毘婆沙師批判

[Skt]

ya eva dhātavaḥ siddhāḥ kṣaṇikatvāt pratītyajāḥ /
niḥsvabhāvās ta evāmi ekānekatvahānitaḥ // v.58 (3)

[Tib]

khamś rnamś nyid las grub pa gang // rkyen las skyes pa skad cig ma //
gcig dang du ma dang bral bas // de nyid dngos po med pa yin // v.58 (3)

[和訳]

「刹那滅であるから、〔十八〕界は縁生として成立している。それらこそまさに単一〔性〕と多性を離れているから無自性である。」

[解説]

この偈は論証式としての条件を満たしていないが、以下のような *MMA* v.1が意図されている。このことは、v.62 (v.7) の証因 (Skt *hetu*, Tib *gtan tshigs*) という語と v.64 (9) の論証 (Skt *sādhana*, Tib *sgrub thabs*) という語がこの偈の内容を指していると考えられることや、この偈のcパーダと *MMA* v.1のaパーダがほぼ平行であることから明らかである。

〔(主張) 自派と他派の主張するこれらのものごとは真実としては無自性である。

(証因) 一と多の自性を欠いているから

(喩例) 影像のようにである。〕 *MMA* v.1

niḥsvabhāvā amī bhāvās tattvataḥ svaparoditāḥ /

ekānekasvabhāvena viyogāt pratibimbavat // (Cf. 一郷[1985]II p.CXIII fn.1.)

このようにMStSでは、存在性の捏造を排除する論理として、まず離一多性による無自性性論証が提示されるのである。ここで、離一多性による無自性性論証について簡単に述べておくと次のようである。何かしら固有の性質を持つ存在として主張されるものごと、つまり有自性であると主張されるものごとが、一と多という二つのあり方いずれとしても成立しないこと (= 離一多性) を証因⁽¹⁷⁾として、その有自性と主張されるものごとの無自性性を論証するのである。

ところで、bパーダでは、「刹那滅であるから縁生である」という十八界 (= 一切法) に対する限定が述べられている。これはおそらく、*MMA* V ad vv.3-7で行われる毘婆沙師によって主張される無為法⁽¹⁸⁾に対する批判を前提としたものであると考えられる。このことは、bパーダの限定と以下の *MMA* V ad v.7の内容を比較すれば明らかである⁽¹⁹⁾。

もし「後々の刹那のものは自立的に生じる」というならば、そのようなことは不可能である。

「これら刹那滅であるものごと（＝無為法）が、自立的に生じると主張するならば、他に依存するものごとではないので、常に存在しているものごとであるか、存在しないものごとになるだろう。」
MMA v.7

〔しかし、〕時々が生じるものごとであるから、それら（＝無為法）も、心と心所のように、縁起性であると明確に理解されるべきである。

ci ste skad cig phyi ma phyi ma rnams rang dbang du 'byung ngo
zhe na/ de ltar 'gyur ba ni mi nus te/

**skad cig pa rnams 'di dag tu// rang dbang 'byung bar 'dod pa
ni//**

**gzhan la bltos pa med pa'i phyir// rtag tu yod pa'am med par
'gyur//**

res 'ga' 'byung ba'i phyir de dag kyang sems dang sems las byung
ba bzhin du rten cing 'brel par 'byung ba nyid du gsal bar shes
par bya'o// (Cf. 一郷[1985]II p.38 //1-8.)

このように、bパーダの限定が*MMAV*の無為法批判を前提としたものであるならば、この偈は離一多性による無自性性論証の提示としてだけでなく、毘婆沙師に対する批判としても機能していると考えられるのである。

2-1-2. 一般人の常識に対する批判

[Skt]

śārīraṃ bhujajaṅghākṣaśīraḥprṣṭhādibhedataḥ /

naikaṃ bhujādayo 'py evaṃ pratyaśambhedaśambhavāt // v.59(4)

[Tib]

de yang lus la rkang lag dang // mgo dang rgyab sogs phyé ba las//
lag pa la sogs gcig kyang med// so sor phyé bas byung ba yin// v.59(4)

[和訳]

「腕、脛、眼、頭、背中などによる分割から、身体は単一なるものではない。腕など [の身体の部分] も同様である。さらなる部分への分割がありえるからである。」

[解説]

この偈から、離一多性による無自性論証を用いた存在性の捏造の排除が本格的に開始される。ここでの批判対象は、MStHの冒頭v.56(1)で述べられた存在性を捏造する三つの主張のうち、一般人の常識であると考えられる。一般人の常識で存在するとされているものごとは様々あるが、ここではその例として、身体が取り上げられている。そして、身体は腕などの各部位に分割されうるものであり、単一なるものではないということを証因として、その無自性が論証されるのである。このような論証は、以下のようなMMAV ad v.10cdの内容を前提としてしていると考えられる。

粗大なものと主張される身体なども、覆われた所と覆われていない所、動く所と動かない所、色に染まった所と染まっていない所、焼かれた所と焼かれない所など対立する部位という自性が把握されるならば、[その身体の自性が、] 単一なるものの自性として妥当であることがどうしてあろうか。

regs par 'dod pa lus la sogs pa yang bsgrigs pa dang / ma bsgrigs
pa dang / gYo ba dang / mi gYo ba dang / tshon gyis bsgyur ba
dang / ma bsgyur ba dang / tshig pa dang / ma tshig pa la sogs
pa mi mthun pa'i phyogs gnas pa'i rang bzhin 'dzin na gcig pu'i

rang bzhin du rigs par ji ltar 'gyur/ (Cf. 一郷[1985]II p.46 11.6-9.)

このMMAV ad v.10cdは、このような一般人の常識における身体
の存在性に対する批判から、身体が部分 (avayava) と結合しながらも単
一なる全体者 (avayavin) とされる主張に対する批判⁽²⁰⁾へと展開する。
このことを考慮するならば、この偈は一般人の常識だけではなく、異教
徒、特にヴァイシェーシカ (Vaiśeṣika) の主張に対する批判をも含意
していると考えられるのである。また、*TDTでも同じように、一般
人の常識に対する批判が行われているので、参考のために以下に提示し
ておく。

[[存在と非存在のくびきを離れた真如] (sadasadyogahinā
tathatā) [TD v.1ab¹] という中の]「存在と非存在のくびきを離れ
た」とは、どのようなことであるかというならば、答える。

「まずこれら世界 (*jagat) は、単一 [性] と多性を離れているか
ら存在しない。山、海、大地、家などに分割される。」「これら様々
なものが顕現するから、[世界は] 自性が単一なるものとして妥当
しない。それぞれの山など [世界の部分] も、それぞれの部分とし
て [単一なるものとして] 妥当しない。」⁽²¹⁾

yod dang med pa'i sbyor ba zhes bya ba ji lta bu zhe na/ smras pa/
re zhig 'gro ba 'di dag ni// gcig dang du ma bral phyir med//
ri dang rgya mtsho sa gzhi dang // khyim la sogs pa tha dad par//
sna tshogs 'di dag rab snang phyir// rang bzhin gcig par rigs⁽¹⁾
pa min//

ri la sogs pa so so yang // so so'i cha yis rigs⁽¹⁾ pa min// (D161
v4-5, P176v8-177r1.)

<1>P rig

2-1-3. 極微説に対する批判

[Skt]

te 'py aṃśā bhedino yāvat paramāṇuḥ sa carcitaḥ /
 śarīreṇaiva te khyātā dharādharadharādayaḥ // v.60(5)
 ekasamdoharūpatvād anekatvam ca nāsty ataḥ / v.61(6)ab

[Tib]

ji srid de yi cha phye ste// rdul phran rnam par dpyad pa ni//
 lus po nyid ni⁽¹⁾ bshad pa las// rten dang brten⁽²⁾ pa la sogs shes// v.60(5)
 gcig gi dngos po bkag pas na// du ma'ang yod pa ma yin no// v.61(6)ab
 <1>P na <2>P rten

[和訳]

『『それら〔身体の〕部分も分割をもつものである以上、かの極微が〔単一なるものとして〕観察されるのである』[と、異教徒（ヴァイシェーシカ）や仏教徒（毘婆沙師、経量部）などが主張するかもしれないが、]まさに身体〔の例〕によって、それら（=集積し粗大なものを構成する諸極微）は山や大地など[と同じように部分を有するので、単一なるものではない]と知られる。』⁽²²⁾「さらに、以上のこと（=極微の単一性が否定されたこと）から、単一なるもの（=極微）の集積という性質であるから多性は存在しない。」

[解説]

一般人の常識に対する批判に続いて、ここでは異教徒と仏教徒に共通する極微説に対する批判が行われる。批判対象である極微説について簡単に述べておくならば、それは、極微がそれ以上分割されず部分を有しない単一で不可視な存在であり、それらによって可視的な粗大なもの（sthūla）が構成されるとする説である。

このような極微説に対して、v.60(5)では、山や大地などと同じように、

極微が部分を有するものであり、単一なるものでないことが指摘され、その存在性が否定されていると考えられるのである。そしてv.61(6)abでは、極微の存在性が否定されていることを理由に、極微によって構成された粗大なもの（＝多なるもの）の存在性も否定されるのである。

ちなみに、極微による粗大なものの構成方法にも様々な説があり、その主なものを挙げるならば以下のようなものである。

- ① 多数の極微が結合し、粗大なものを構成するというヴァイシェーシカの説。
- ② 多数の極微がわずかな隙間をもって集合し、粗大なものを構成するという毘婆沙師の説。
- ③ 多数の極微が隙間なく集合し、粗大なものを構成するという経量部の説。

これらの説は、*MMAV ad vv.11-13*で逐一批判されており⁽²³⁾、さらに*SthS*の「無形象瑜伽行派の定説綱要」のvv.33(1)-36(4)abでも瑜伽行派の立場から逐一批判されている⁽²⁴⁾。紙数の関係上、これらの批判を本稿で取り上げることはできないので、その内容が簡潔にまとめられている、v.59(4)の解説で紹介した**TDṬ*に続く箇所を以下に提示する。なお、以下の**TDṬ*からは、v.60(5)で省略されている極微が部分を有するものとされる理由も理解することができるだろう。

「このようであった（＝世界やその部分である山や海などが分割されるので単一なるものでない）としても、無分割の諸極微よりなる身体をもつものはバラバラ〔に分割されるもの〕ではない」というならば、それら（＝粗大なものを構成する諸極微）も〔単一なる〕存在ではない。〔なぜなら、極微それ自体が〕方位の区別によって分割されるからである。また、次のようにナーガールジュナ御前によって言われている。

「方位の分割から極微にも分割が現れる。それぞれの部分が観察されたもの、それをどうして[無分割で部分をもたない単一なる]極微[とすることができる]だろうか。」『菩提心釈』(*Bodhicittavivaraṇa*) v.18

さらに、他でも[次のように]説かれている。

「[個物は多数の極微が結合したものとヴァイシェーシカが主張するならば、]同時に[上・下・四方]六個[の極微]と結合するから、極微には六部分があることになる[だろう]。[個物は多数の極微が隙間なく集合したものと経量部が主張するならば、]六[個の極微]が同じ場所にあるから、[その極微の集合した]個物も極微大であるだろう。」『唯識二十頌』(*Vīṃśikā*) v.12

ṣaṭkena yugapad yogāt paramāṇoḥ ṣaḍamśatā /

ṣaṅṅāṃ samānadeśatvāt piṅḍaḥ syād aṇumātrakaḥ // (Cf. Lévi [1925] p.1)

諸極微が不成立である時、すなわち、単一なるものがわずかなでも成立しない時、単一性が成立しないから、さらに、それ[ら単一なるもの]が集積した自性としての多なるものも成立しないのである。一と多を離れているものごとは何であれ存在すると見ることも、主張することも不合理である。それについても[次のように]説かれている。

「あるものごとを考察してみた時、それぞれに単一[性]が存在しない。単一性が存在しないものに[単一なるものが集積、集合、結合などした性質である]多[性]の存在もない。」*MMA* v.61

de lta mod kyi rdul phra rab dag mi phyed pa'i lus can so so re re
ba yin no zhe na/ de dag kyang yod pa ma(p. omits ma) yin te/
phyogs cha'i bye brag gis⁽¹⁾ tha dad pa'i phyir ro//

de skad du yang / Klu sgrub kyi zhal snga nas kysis/

**phyogs kyi cha shas tha dad pas// rdul phran la yang tha dad
snang //**

**cha shas cha shas can brtags⁽²⁾ gang // de la rdul phran ji ltar
yod//**

ces gsungs pa dang / gzhan las kyang /

**drug gis cig car sbyar ba yis// rdul phran cha shas drug pa
nyid//**

**drug po rnams ni yul gcig na// gong bu rdul phran tsam du
'gyur//**

zhes bshad pa yin no//

rdul phran rnams ma grub par ni gcig pu cung zad kyang mi
'grub la/ gcig pa nyid ma grub⁽³⁾...pa'i phyir...⁽³⁾ yang de bsags pa'i
ngo bo nyid du ma yang mi 'grub bo//

gcig dang du ma dang bral ba'i dngos po gang zhig yod par 'gyur
na mthong ba'am 'dod par rung ba ma⁽⁴⁾ yin te/

de yang /

**dngos po gang la rnam dpyad na// de dang de la gcig med pa//
gang la gcig pa nyid med pa// de la du ma'ang yod ma yin//**

zhes bshad do// (D161v5-162r2, P177r2-6.)

〈1〉P gi 〈2〉D rtags 〈3〉Ppar 〈4〉D om.

さて以上は、離一多性による無自性論証を用いた外的なものごとに関する存在性の捏造の排除である。これ以降は、離一多性による無自性論証を用いた識 (vijñāna)、心 (citta)、知識 (jñāna) といった内的なものごとに関する存在性の捏造の排除が行われるのであるが、これについては次稿を期したい。

[略号表]

add.	added in	当該箇所を追加アリ
conj.	conjecture	校訂者の提案にもとづく訂正

D	The Tibetan Tripiṭaka sDe dge Edition	チベット大蔵経デルゲ版
em.	emendation	校訂者の想定にもとづく訂正
fol(s)	folio(s)	写本の葉、或いは写本の複数葉
Ms(s)	Manuscript(s)	写本、或いは諸写本
n.e.	no equivalent for	対応箇所ナシ
om.	omit(s)	当該箇所を欠く
Ota	The Catalogue of P	チベット大蔵経北京版大谷目録
P	The Tibetan Tripiṭaka Peking Edition	チベット大蔵経北京版
r	<i>recto</i>	写本及び版本の表面
Skt	Sanskrit	サンスクリット語
Tib	Tibetan	チベット語
Toh	The Catalogue of D	チベット大蔵経デルゲ版東北目録
v	<i>verso</i>	写本及び版本の裏面

[一次文献]

- ・ *Advayavajrasaṃgraha* by Maitreyaṅātha (a.k.a. Advayavajra). See 密教聖典研究会[1988][1989][1990][1991] & Mathes[2015].
- ・ **Guruṣaraṃṣpārākramopadeśa* (*GPKU) = *Bla ma brgyud pa'i rim pa'i man ngag* by *Vajrapāṇi. Toh3716, Ota4559.
- ・ *Bodhicittavivarāṇa* by Nāgārjuna. See Lindtner[1982].
- ・ *Tattvadaśaka* (TD) by Maitreyaṅātha (a.k.a. Advayavajra). See 密教聖典研究会[1991] & Mathes[2015].
- ・ **Tattvadaśakaṭīkā* (*TDṬ) = *De kho na nyid bcu pa'i rgya cher bshad pa* by *Sahajavajra. Toh2254, Ota3099.
- ・ *Tattvaratnāvalī* (TRĀ) by Maitreyaṅātha (a.k.a. Advayavajra). See 宇井[1963] & Mimaki[1986].
- ・ **Bodhimārgapradīpapañjikā* = *Byang chub lam gyi sgron ma'i dka'*

〔中〔道〕の定説綱要〕和訳研究（1）

- ‘grel by *Atiṣa (or *Dīpaṅkaraśrījñāna). Toh3948, Ota.5344.
- ・ *Madhyamakālaṃkāra* (MMA) & *vṛtti* (MMAV) by Śāntarakṣita. See 一郷[1985]II.
 - ・ *Madhyāntavibhāga* & *bhāṣya* by Asaṅga or Maitreya-nātha. See Nagao[1964].
 - ・ *Sthitisamāsa* (SthS) by *Sahajavajra. Skt → The Nepal-German Manuscript Preservation Project B 24/4. (incomplete) and see 松田 [1995], 岩田[1998][2000][2010][2013b][2014], and Onians[2003]; Tib → Toh2227, Ota3071.
 - ・ *Laṅkāvatāra* See Vaidya[1963].
 - ・ *Vimśikā* & *vṛtti* by Vasubandhu. See Lévi[1925]

〔二次文献〕

- ・ Bendall, Cecil
1905 : SUBHĀṢITA-SAMGRAHA, Le Muséon Nouvelle série IV-V.
- ・ Hatano Hakuyu (羽田野 伯猷)
«A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tāntric Buddhism in India», 『チベット・インド学集成』 第三卷, インド編 I, 法蔵館, pp.166-181所収.
- ・ 一郷 正道
1985 : 『中観莊嚴論の研究』 I (研究) & II (テキスト), 文栄堂.
- ・ 岩田 孝
1998 : 『『定説集成』 (Sthitisamuccaya) 和訳研究—無形相知識瑜伽行派の定説(1)—』, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 41-1, pp.3-14.
2000 : 『『定説集成』 (Sthitisamuccaya) 和訳研究—無形相知識瑜伽行派の定説(2)—』, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 45-1, pp.13-26.
2010 : 『『定説集成』 (Sthitisamāsa) 和訳研究—無形相知識瑜伽行派の定説(3)—』, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 56, pp.5-17.
2013a : 『『真実十偈釈』 (tattvadaśakaṭīkā) 和訳研究 (ad Tattvadaśaka 5d-6)』, 『伊藤瑞叡博士古希記念論文集』, pp.767-781.

- 2013b : 『定説集成』 (Sthitisamāsa) 和訳研究—無形相知識瑜伽行派の定説(4)—, 『東洋の思想と宗教』 30, pp.1-33.
- 2014 : 『定説集成』 (Sthitisamāsa) 和訳研究—有形相知識瑜伽行派の定説(5)—, 『東洋の思想と宗教』 31, pp.22-51.
- ・磯田 熙文
1978 : 「pāramitā-yāna と mantra-yāna」, 『東北大学文学部研究年報』 29, pp.105(142)-135(112).
 - ・Lindtner, Christian
1982 : NAGARJUNIANA [Indiske Studier IV], Akademisk Forlag.
 - ・Lévi, Sylvain
1925 : Vijñānamātrasiddhi, deux traites de Vasubandhu, Viṃśatikā et Triṃśikā, Paris.
 - ・Mathes, Klaus-Dieter
2015 : A Fine Blend of *Mahāmudrā* and Madhyamaka, Maitripa's Collection of Texts on Non-conceptual Realization (*Amanasikāra*), Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
 - ・松田 和信
1995 : 「サハジャヴァジュラの仏教綱要書 (Sthitisamuccaya)」, 『印度学仏教学研究』 42-2, pp.848(205)-843(210).
 - ・松本 恒爾
2015 : 「Sahajavajra の Candrakīrti 観について」, 『密教学研究』 47, pp.49-66.
2016a : 「密教における中観思想—Sahajavajra の例を中心として—」, 『大正大学総合佛教研究所年報』 38, pp.217-227.
2016b : 「密教と顕教—Advayavajra とその弟子たちを中心として—」, 『現代密教』 27, pp.161-175.
 - ・密教聖典研究会
1988 : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(1)—」, [Its contents: *Kudṛṣṭinirghātana*, *Kudṛṣṭinirghātavyākyaṭippinikā*,

Mūlāpatti, Sthūlāpatti, Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa], 『大正大学総合佛教研究所年報』 10, pp.234(1)-178(57).

1989 : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(2)—」, [Its contents: *Caturmudrāniścaya, Sekatātparyasaṃgraha, Pañcākāra, Amanasikārādhāra, Sahajaṣaṭka*], 『大正大学総合佛教研究所年報』 11, pp. 259(86)-200(145).

1990 : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(3)—」, [Its contents: *Māyānirukti, Yuganaddhaprakāśa, Mahāsukhaprakāśa, Tattvaṣiṅkā, Mahāyānivaṣiṅkā, Premaṣaṅcaka*], 『大正大学総合佛教研究所年報』 12, pp. 316(49)-282(83).

1991 : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(4)—」, [Its contents: *Sekanirdeśa, Svapnanirukti, Tattvaparakāśa, Apratiṣṭhānaprakāśa, Nirvedhapañcaka, Madhyamaṣaṭka* (or *Madhyamaṣaṭka*), *Tattvadaśaka*], 『大正大学総合佛教研究所年報』 13, pp.291(46)-242(95).

・Mimaki Katsumi (御牧 克己)

1986 : “The Tattvaratnāvalī of Advayavajra (Tibetan Text)”, 『経量部(Sautrāntika) 研究』 所収.

・三友 健容

2007 : 「『アビダルマディーパ』における『本論』」, 『印度学仏教学研究』 55-2, pp.875(154)-867(162).

・望月 海慧

2006 : 「中観と唯識を融合する「大中観」とは何か—仏教思想における相克と融和の一断面—」, 『大崎学報』 162, pp.83-94.

・Nagao, Gadjin M. (長尾 雅人)

1964 : *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団.

・Onians, Isabelle

2003 : *Tantric Buddhism Apologetics or Antinomianism as Norm* (Ph. D thesis).

- ・ Roerich, George N.
1949 : The Blue Annals, Part I&II (Bound in One), Calcutta, (repr. Motilal Banalasisdass 1976).
- ・ 宇井 伯壽
1963 : 「ADVAYAVAJRA TATTVARATNĀVALĪ」, 『大乘仏典の研究』, pp.1-52所収.
- ・ Vaidya, P. L.
1963 : SADDHARMALANKĀVATĀRASTŪRAM [Buddhist Sanskrit Text No.3], The Mithila Institute.
- ・ 矢板 秀臣
1995 : 「*Sahajavajra* の Dharmakirti 観」, 『密教学研究』 27, pp.31-45.

註

- (1) 不完全な偈 (e.g. v.32(23)) が存在することやMsの欠落などから、この総数は暫定的なものであり、今後訂正される可能性もある。
- (2) セクション名が偈に組み込まれているので、「綱要」(samāsa) という語が省略されていると考えられる。
- (3) Sūtrānta-はMsママの読みである。とりあえず、このような読みを支持する根拠としては、以下のような *SthS* の冒頭偈をあげることができる。
dharmapudgalanairātmyaṃ natvā tad upadīsyate /
vaibhāṣāsūtravijñānamadhyamānukramāt sphuṭam // v.1(1)
しかし、この偈の vaibhāṣā がセクション名としては Vaibhāsika とされていることからすれば、Sūtrānta- は Sautrāntika- と修正されなければならない可能性がある。なお、vaibhāṣā という語の用例については、三友[2007]を参照。
- (4) Msの最終葉が欠落しているため、セクション名を確認することができない。それ故、このセクション名は筆者による推定である。ただし Tibでは、セクション名が特に設けられていないことからすれば、*SthS* が著作された当初からそれが無かった可能性も考えられる。
- (5) 岩田[1998]では、*SthS* のテキスト (サンスクリットとチベット語訳) とその英訳注の発表が予告されている。しかし、現時点 (2019) で、それは未発表であるようなので、後に無意味となるかもしれないことを承知で本稿を発表する次

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（1）

第である。

- (6) 具体的には、*サハジャヴァジュラの師とされるマイトレーヤナータ (Maitreyanātha, a.k.a. Advayavajra, ca.974-1065 or 986-1077) による『真実宝璣』 (*Tattvaratnāvalī*, 以下 *TRĀ*) と、同輩の*ヴァジュラパーニ (*Vajrapāṇi ca.1000-1100) による『師資相承次第説示』 (**Guruparamparākramopadeśa*, 以下 **GPKU*) である。
- (7) ただし、その順序は異なっている。*TRĀ* と **GPKU* では、有形象瑜伽行派→無形象瑜伽行派という順序で配置されているが、*SthS* では、無形象瑜伽行派→有形象瑜伽行派という順序で配置されている。このことについては、岩田[2014] pp.23-24で詳しく論じられており、その結論部分を引用するなら以下のようにある。

即ち、瑜伽行派の定説の説示では、理解の容易な外的対象の否定と内的な形相の否定を主張する無形相知識論を先に示し、次に、内的形相の全くの非存在という問題点を超えようとして形相の存在性を認める有形相知識論を論じ、更に、この有形相知識論には識内の形相の存在性を過剰に付託するという可能性のあることを考慮に入れ、有形相知識論の假託をも含めたすべての假託を超越する中観派の定説を論じる、という論述の構構があったのではないだろうか。

このように瑜伽行派の分派の順序が、その教理の優劣でなく、*SthS* の構成に起因するという解釈はかなり有力な説であると考えられる。何故なら、*サハジャヴァジュラが知識論そのものを批判しており、瑜伽行派における知識論に優劣をつける必要性があるとは考えられないからである。

- (8) *TRĀ* と **GPKU* では、中観派が一切法無住論 (Sarvadharmāpratiṣṭhānavāda) と幻喩不二論 (Māyopamādvayavāda) という二派に分類されている。なお、*サハジャヴァジュラによる、マイトレーヤナータの『真実十偈』 (*Tattvadaśaka*, 以下 *TD*) に対する注釈『真実十偈釈』 (**Tattvadaśakaṭīkā*, 以下 **TDṬ*) では、有形象中観 (Skt **Sākāramadhyamaka*, Tib rNam pa dang bcas pa'i dbu ma) と無形象中観 (Skt **Nirākāramadhyamaka*, Tib rNam pa med pa'i dbu ma) という二つの中観派について言及されているが、これら二派はいずれも批判されている。これら二派に対する批判については、松本[2015]を参照。
- (9) Cf. **TDṬ* ad v.2 (D166v3-4, P182r6-7)。なお松本[2015]pp.55-56で、この箇所は和訳されている。
- (10) *サハジャヴァジュラが離一多性による無自性性論証を行う例としては、v.58(3) や v.59(4) の解説中の **TDṬ* などを参照。
- (11) もちろんこのような場合、いわゆる帰謬派と自立論証派との対立、つまり勝義

- を述べる際に論理学を用いるか否かという対立が、*サハジャヴァジュラの中観思想においてどのように解消されているかということが問題となる。この問題については、さらなる検討を要する。また、全く同じ問題が存在する中観派の論師として、アティシャ (*Atiśa or *Dīpaṅkaraśrījñāna ca.982-1054) やアバヤーカラグプタ (Abhayākara-gupta, ca.1150-1250) などを挙げることができる。
- (12) 例えば、『中辺分別論釈』(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*) ad Chap.5 vv.23-25などを参照。
- (13) これらの三つの教理はそれぞれ別個なものではなく、有機的に結びついている。つまり、大乘とは中観思想という波羅蜜理趣と真言理趣であり、前者によって示された究極の目的(さとり)が、後者を手段として達成されるのである。このような関係性は、*SthS* vv.99(1)-103(5)で述べられている。
- (14) 周知の通り、「大中観」という語は、アティシャの著作『菩提道灯論細疏』(**Bodhimārgapradīpaṇjikā*) で自身の中観思想を表す語として用いられており、後のチベット仏教ではチヨナン派 (Jo nang pa) の他空 (gzhan stong) 説を指すものとなる。この「大中観」については、望月[2006]などを参照。
- (15) 残りの vv.90(35)-98(43)では、*サハジャヴァジュラ自身の中観思想が述べられている。ちなみに、*サハジャヴァジュラは**TDṬ* (D174r4-7, P192r2-6) で、自身の中観思想を「双運中観」(Skt *Yuganaddhamadhyamaka or *-madhyamā, Tib Zung du 'jug pa'i dbu ma) と呼んでいる。この箇所は松本[2015]pp.56-67に和訳されている。
- (16) *MStS*で引用される *LA*19偈半のうち9偈は *MMAV*でも引用されている。*MStS*における *LA*の引用に関する詳細な分析は別稿を期したい。
- (17) このような証因がどのようにして成立するかについては、*MMAV* ad vv.61-62で述べられている。
- (18) 毘婆沙師の無為法については、*SthS* v.2(1)abでも以下のように述べられている。
「虚空と二つの滅 (= 択滅と非択滅) の三つの無為は常住である。」
ākāśaṃ dvau nirodhau ca nityaṃ trayam asaṃskṛtam /
なお松田[1995]では、これがアールヤデーヴァ (Āryadeva) 作とされる『智心髓集』(*Jñānasārasamuccaya*) v.21abと同一であることが指摘されている。
- (19) この *MMAV* ad v.7に至るまでの経緯を簡単に述べるならば、次のようになる。常住なものごとは、その効力がさまたげられることがないので、その結果を同じ刹那に生じる。(*MMAV* ad v.2) → 無為法は、刹那滅である修所成の智の対象であるから常住なものごとではない。(*MMAV* ad v.3) → 無為法が常住であるならば、修所成の智も常住であるはずである。(*MMAV* ad v.4) → 以上のようなものであるならば、無為法は、修所成の智が生じる刹那 (前々の刹那) の効力に

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（1）

よって生じるから、刹那滅である。（*MMAV* ad vv.5-6）

- (20) 全体者批判は、*SthS*でも、「無形象瑜伽行派の定説綱要」v.36(4)cdで既に行われている。この詳細については岩田[2010]を参照。
- (21) これら二偈が*サハジャヴェージュラによるものか否かは不明。
- (22) v.60(5)の和訳については暫定的なものである。特にdパーダは、一応サンスタリットによって「山（*dharādhara*）や大地（*dharā*）など」と訳しているが、Tibによれば「支えるもの（*rten*）と支えられるもの（*brten*）など」となる。このTibを考慮して、「大地を保持するもの（*dharā-dhara*）と大地」と訳することは可能かもしれないが、どのような意味をなすのかは不明である。
- (23) *MMAV*の極微批判の詳細は、一郷[1985]I pp.12-25を参照。
- (24) vv.33(1)-36(4)abの詳細は、岩田[1998][2000]を参照。

〈キーワード〉

Sahajavajra Sthitisamāsa 教理綱要書 中観派